ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　取り敢えず昼食を済ませた後、俺以外の三人は何をする訳でもなく、ただダラダラと午後を過ごしていた。

　俺？　俺はあれだ。そんな三人を、椅子に座りながら観察している。一応、忙しいつもりだ。

こういう時コミュ力のある奴なら、他の三人と、これまでの日々を穴埋めするかのように交流するのだろうが、生憎俺にそんなコミュ力は無い。いや、そもそも、コミュ力のある奴なら、そんな穴埋めをする必要になる状況に陥ることなど無いのだろうが。

何時に起き、寝ているとか、自主鍛錬は何時頃始めてどれくらいの時間続けるだとか、ある程度は知っているつもりだ。

いや、まあ……ここら辺のことは、自分の自主鍛錬の時間の関係で、取り敢えず覚えているという、まあ要するに『俺の都合』で覚えているだけなんだがな。

それ故、俺は三人が普段どうしているだとか、どんなものが好きだとか……つまり『こいつら自身の事』、そういったものは何も知らない。

「うへぇ……」

　何というか……いやまあ、三人に謝ってからずっと思っていることなのだが、俺ってあまりにも『仲間』というものに無頓着ではなかろうか？

　うん……あれだ。ここから変わればいいんだ。『知る努力』はここから始めればいいんだよな。そうだ、きっとそうだ。

「ん？　ロラン、どうしたん？」

　一人でうんうんと唸っていたのが不気味だったのか、レイが何かぎこちない笑顔で俺の顔を覗き込んできた。

「……いや、ちょっとな。開き直らないと、やってられないんだ」

「へ？」

「気にしなくていい」

　と、今までの俺なら、こう言えばレイもあまり追求してこないのだが……さっきあんなことがあったばかりだからだろう。

「いやいや……何か悩みがあるなら、お姉さんに聞かせてごらん？」

　なんて踏み込んできやがった。

　いや、嬉しいよ？　嬉しいんだけどね。

　だが、俺の悩みが『皆の事を、ちゃんと知りたい』とか、そうそう簡単に人に……特に本人に言うにはちょっと勇気がいるのだよ。

そんな事を知らないレイに、罪は無いのはよく分かっているんだが……恥ずかしさ故に俺は、

「『お姉さん』って、俺より一個しか違わないだろう……」

　軽口を叩いてしまう。一個上なら確かに『お姉さん』ではあるが、同期のメンバーだからかそんな気がしないのだ。

　するとレイは「むむむ」と唸り、心外だと言わんばかりの顔で口を開く。

「これでも、割と樹葉ちゃんとか詠ちんとかの相談を真剣に聞いてあげてるんだけどなー」

「……えっ？　マジで？」

「そうそう、マジマジ」

　そんなことは初耳で思わず聞き返した俺に、フフンと得意げに鼻を鳴らしてそう言うレイ。

　どうやらあの二人は、例え同期であっても、レイのことをちゃんと『お姉さん』として見ているらしい。俺なんかとは大違いである。

　と、ここで、だ。

　よく考えてみれば……レイは『お姉さん』である前に、俺達のリーダーだったことを思い出す。

「なあ、あの二人がお前を相談するのって、お前が『お姉さん』だからじゃなくて『リーダー』だからなんじゃないのか？」

「……ほぇ？」

　随分と間抜けな声を上げたレイは、途端に固まる。いや、『お姉さん』より『リーダー』って思われている方が、余程いいと思うんだが……どうやらレイの中では『お姉さん』と見て欲しい気持ちの方が上らしい。

「まぁ……悩んでいるのは確かだけどな。でも、もう少し一人で考えてみるわ」

「そ、そう？」

　何とか立ち直ったらしいレイは、今度は先程とはうって変わって、かなり真剣な眼差しを俺に向けてくる。

　多分、今までみたいに俺が一人で抱え込まないか心配してくれているんだろう。

　それは、素直に嬉しかった。でも、まあ……あれだ。

　今までやらかしてしいた俺としては、ここらでちゃんと『自分の仲間』がどのような人なのか、ちゃんと一人で考えたい。

　どうすればいいのかは、まだ分からないけどな。

「おふろ沸いたよー」

　樹葉の声で、俺はハッと時計を見ると、もう六時。

　どうやら、考えることに結構な時間を費やしてしまったらしい。

　うちでは、風呂は曜日によって違うローテーションで入ることになっている。今日は木曜日だから、一番風呂は詠で、次に俺、レイ、樹葉の順番だ。

　ああ、そういえば。

「なあ」

　俺は、パジャマを持って脱衣所に向かう詠にそう声をかける。前に詠が『また一緒にお風呂入りましょう』と言っていたことを思い出したのだ。

　それに以前、何かの本で読んだのだが、子供の悩み事は風呂で聞くのが一番だそうだ。詠は『子供』と言えるかは微妙な年頃だし、聞くのは悩みとかでは無いのだが、別に大差は無いだろう。

　つうことで　ちょっと小っ恥ずかしいものの、俺は勇気を出してそう言ってみる。

「俺も一緒に、風呂入ってもいいか？」

「……へっ？」

途端、得も言われぬ間抜けな音と共に、詠の顔がまるで薔薇のように真っ赤に染まっていく。

あれ？　俺、何か間違ったか？

いや、間違っているはずが無い。女のように見えるがこいつは男。俺に裸を見せることに羞恥心など無いだろう。そもそも羞恥心などあれば、先日、強引に風呂に引き込んだりはしなかったはずだ。

「え……あの……」

「なあ、いいだろう？」

　チラッと横を見れば、レイと樹葉は何故かニヤニヤしていた。お前らは一体どうしたんだ。

　問い詰めたいのは山々だったが、今は詠の返答を待つのが先。

　だが、

「えと……あの……」

　詠は何故かもじもじしていて、中々俺の誘いにｙｅｓともＮｏとも言ってくれない。一体何がお前をそうさせるんだ、と言いたい気持ちを抑え……きれず、しかし口には出さない。

その代わり、俺は自分の部屋に向かう。

「えっ？　あの、ロラン？」

　後ろから詠の声が聞こえたが、それには何も答えない。

　部屋に入った俺は、取るものを取って、さっさと自分の部屋を出る。

　部屋から出てきた俺を見た詠は、嬉しいのか、緊張しているのか、嫌なのか、どうにも区別のつかない顔をする。その視線は、俺……では無く、俺が抱えている物に向けられていた。

「あの、ロラン。それは……？」

「見りゃ分かんだろ。パジャマだ」

　毎日俺が着ているやつである。俺が言えたことでは無いのは間違いないが、一緒に過ごしていれば、聞くまでもないことだろうに。

「あ、いえ。そうでは無く……」

「ごちゃごちゃ五月蝿い。ほら、行くぞ」

　まだ何か言いたそうな詠を、俺はその腕を引っ張って無理矢理風呂場へと連れて行く。あわわあわわとまだ何やら呟いていたが、それもガン無視だ。

「わ……分かりましたよぉ……」

　流石に風呂場まで連れてくると観念したらしいが、その表情は「観念した」という感じでは無い。その顔は何というか――

「……嬉しそうだな」

「いっ？　いえっ！」

　俺の言葉に、素っ頓狂な凄い声で詠は反応する。図星なのが見え見えだった。

　俺は、フッと鼻を鳴らす。中々可愛い奴じゃないか、と思ったのだ。いや、思ってしまった、というべきか。

　そこから先、俺は自分を止められなかった。

　俺と詠は、脱衣所で服を脱ぐ。俺は、さっきあんなことを思ってから、頻繁に詠の方へと目を向けている。あまり健全な視線では無いのだろうなとは思う。

　こいつは性別こそ男だが、見た目は完璧な女の子なのだ。どうしても変な目で見てしまうのは、仕方のないことだろう。そうに違いない。

　詠が服を全部脱いで下着姿になると、俺はもう目が離せなくなっていた。幸運なのは、詠は――気が付いているのかいないのかは分からないが――鼻歌に夢中で、俺の視線に気がついていないことだろう。

　それをいいことに、俺は詠の美しい肢体を、認めたくはないが上から下まで舐めるように眺め回してしまったので、もしかすると不幸なことなのかも知れないが。

　そしてついに、詠の体の大事な部分を隠していた布切れが全て取り払われ、俺は流石に目をそらした。

　これ以上はヤバイ気がしたのだ。主に、体の反応的な意味で。

「……ロラン、どうかしました？」

「……いや、何でもない」

　詠は男。詠は男……。

　俺は心の中でそう唱えながら、平静を装う。こいつは男。変な気を起こす謂れはどこにも無いはずだ。

　よし、問題ない。

　だが、詠はどこか怪訝そうな目で俺を見つめている。

「あ、いえ。まだ脱ぎ終わってないようなので……」

　見れば、俺はまだ下着類を着けたままだった。

「先週ぶりですね、ロラン」

　風呂場に入ると、詠がそんなことを呟いた。

「あれ、先週だっけ？」

　なんだか、もっと時間が経っているように思えたのだが……確かに、思い返せば先週のことだった気がする。時間が経つのは意外と遅い。

「ところで、どうしたんですか？」

「ん？　ああ、この間言ってたろ？　『また一緒に入りましょう』って」

「……えっ？」

　自分で言ったことを忘れていたのか、はたまた俺がそんな約束を覚えているとは思っていなかったのか……恐らく後者だろう。詠は驚いていた。

　自業自得な気がするので、俺は構わず続ける。

「それに、『友達とお風呂一緒に入って、洗いっこするの夢だった』って言ってただろ？　この間は頭だけしか洗わなかったから、今度は背中でもどうかな、って思ってさ……って、なんだその顔は？」

　突然、「えへへ」と言いながらニヤけだした詠に、俺は思わず突っ込んだ。だがそんな俺の突っ込みが聞こえていないのか、あろうことに詠は俺の腕に自分の腕を絡ませてくる。

　そんな女性らしい仕草にこっそりドキッとしながらも、俺は詠を腕から引き離すために、俺は詠の胸に手の平を当てた。

　何故胸に手を当ててしまったのか、この時の俺を小一時間問い詰めてやりたいと思ったのは、そのすぐ後だ。

ふと、ムニュっとした感触があったような気がした。

　勿論、『気がした』だけである。何度も言うが詠は男。脂肪が全くない訳では無いが、基本、そこにあるのは皮だけなのが普通だ。

　だがこの時の俺が、そんなことに気づけるはずも無い。

　ついつい、いらんことを口走ってしまった。

「……なあ。胸、育った？」

　この後何が起こったのか、俺は知らない。

　ただ気が付けば俺の視界は、風呂場の天井を映し出していた。

　気まずい沈黙が、風呂場を包む。

　いや、その原因はわかっている。男に向かってあれは無いだろうと、俺は湯船につかりながら現在進行形で自己嫌悪に陥っていた。詠は一緒に湯船につかっているが、今は俺と背中を合わせているため、どんな表情をしているのかは分からなかった。

　ちなみに、俺が詠の胸を触ったのは、過去に一度も無い。何故あんな事を思ったのだろうか。

　殴られた顎が、まだジンジンと痛む。詠は戦闘要員では無いが、あの一撃は中々に見事だったと思う。

「あー……その、なんだ。すまなかった、許してくれ」

「……むぅ」

　流石にいたたまれない雰囲気のままなのはよろしくない。俺は振り向いて謝ると、詠もこっちを向いてくれる。だが詠は頬を膨らませたままだった。

「……じゃあ、背中流してください」

　とは言え、詠もアッパーした直後ほど怒っているわけでは無いようで、そんな条件を出して、少しだけ笑顔を見せてくれる。

　当然、頷かないなんて選択肢は俺には無い。

　俺達は一緒に湯船からあがり、詠は風呂場に置いてある椅子を一個取って、腰掛ける。

「……なんか、ついこの間もこんな事あったよな」

「ええ。僕とロランで、洗いっこしましたよね」

　あの時のことを思い出すと、ちょっと顔が熱くなる。あれは色々とまずい。もう何度も言っているが、詠はこんな見てくれだが男なのだ。意識してしまうのも仕方無し、というものだ。

　俺は壁に掛かっているナイロンタオルを取って、ボディソープを少し垂らし、泡立てる。

　充分泡が立ち始めたところで、それを詠の、シミ一つない真っ白な背中にそれをつけた。

「こんぐらいでいいか？」

「ええ、丁度いい感じです」

　詠の背中を擦りながら俺が聞くと、詠はちょっと気持ちよさそうな声を上げる。

「…………」

　ヤバイ。これはヤバイ。

　なんだか詠のこんな声を聞いていると、変な気を起こしそうになってきた。

　声を出すと何をするか分からない……否。『詠の背中を洗う』という行動以外の事を考えてしまうと、本当に何をするのか自分でも分からなかった。

　俺はただ無心で、詠の背中を、ナイロンタオルで擦り続ける。

「……あの、ロラン？」

　そう。無心で、ひたすらに、まるでロボットであるかのように、ただ上下運動を繰り返す。

「あの……」

　よし、これならいける！　いけるぞ俺！

「あの、ロランってば！」

　不意に、俺の耳に詠の、風呂場故にかなり拡大された声が響く。

「ん？　どうした？」

「あ、いえ……あの、ちょっと擦りすぎじゃありませんか？　もう十分ですよ？」

「あっ」

　言われて気が付く。

「す……すまん」

「いえいえ。でも、どうしたんですか？」

「大きく言えば……お前のせい？」

「……えっ？」

　聞いて驚いたような声をあげる詠だが、俺に責任は無い。これは断言させてもらう。

「いやさ。なんか、お前を見てたら変な感じがしてきてさ」

　責任は無い。無いったら無いのだ。

「あの……ロラン？　なんか目が変ですよ？　あと息も荒いし……」

　だから……

「俺は悪くないんだ。悪いのは、こんな無防備な姿をさらしている奴なんだよ。分かるか？」

　早く沈まれ、俺！

　何が『分かるか？』だ！　意味が分からんわ！

　だが、俺は自分を止めることが出来なかった。

「ちょ……ロラ――」

　だが、詠が何かを言う前に、俺は詠に背中から抱きつく。

　それだけならまだいい。いや、決して良くないが。

　気が付けば俺は、詠の胸を掴みにかかっていることに気がついた……って、いや、ほんと何してんの俺っ？

　マズイマズイ、これは冗談抜きで本気でシャレにならん！

「ひゃぁ！　ぁんっ……あぁっ！　ちょ、ホントに……っんんん！」

　俺の指の動きに合わせ、詠の、およそ男の口からは中々出てこないような声が風呂場に何度も響く。

　それが俺の行為をさらに加速させていた。

　詠はジタバタしているが、そこは俺との、戦闘経験の差が如実に表れている。はっきり言って、どう足掻いても詠が俺の手から逃れることは出来ないのは明白だった。

　そしてついに、ジタバタしすぎて詠も疲れたのか、動きにキレが無くなってくる。もはや抵抗虚しく、俺のされるがままに――

　ヤバイ……これ、絶対セクハラじゃんっ？

　あ、でも……

　ふと、俺は思う。

　セクハラって、異性にやるから『セクハラ』なのでは無いだろうか？　俺は男。そして何度も言うが、詠も『男』だ。

　ならば、別にこのまま胸を揉んでいても『セクハラ』にはなるまい。そうだ、きっとそうだ。

　いや、『セクハラ』どころか、男同士のただの『じゃれあい』の範疇だろう。

「うん、問題ないな！」

「何がですかっ……ぁあんっ！」

　動きはともかく、大きな声はまだ出せるっぽい。

　それすらも俺を興奮させるだけで、このままセクハラ……では無くじゃれあいを続ける俺達。男なのに妙に柔らかい詠の胸。こんな時間が永遠に続く。そう思っていた。

　だが――

「おーい、二人共。風呂場で何大きな声出してんのー？」

　レイの呆れたような声がすぐそばから聞こえて、俺はハッと我に返るのだった。